

昭和62年度 日本山岳会年次晩餐会



年次晩餐会の席で浩宮殿下は新入会員を代表して挨拶された

恒例の年次晩餐会が、十二月五日(土)、午後六時から、会のルームからも近い私学会館で、全国から約三百六十名の会員が出席して開かれた。

会場となる三階「富士の間」のロビーには、四時半から簡易バー、山岳グッズコーナー(売店)も開設され、暮色の迫る頃には、もう受付を済ませた会員たちの姿も見えはじめていた。会場に用意された三十二の各円卓に、席名として全国の名山の名が付けられているのも、山岳会ならではの好演出であった。

午後六時前に、テーブルマスターの迎える各席に出席者が着き終るころ、本年度ご入会の浩宮さまが、会のルームにお立ち寄りになり、全員の拍手で迎えられ、中央のテーブルにお着きになられた。

早速、鴨原常務理事の司会で、開会の辞に

昭和六十二年度年次晩餐会

—ご入会の浩宮さまもご出席—

つづいて議事の進行に移り、最初に今西会長の開会の挨拶があった。

会長挨拶

今西会長は、まず本席に、本年ご入会なされた浩宮さまにご出席をいただいたことを、会員一同、心から歓迎申し上げるとともに、さきほど会のルームにもお立ち寄りになり、会の資料の一部や図書室をご覧になって、会の歴史と伝統の一端に触れていただいたことを、皆様に喜びをこめてご報告すると挨拶した。

つづいて会の事業計画の報告に移り、現在、会は三国友好登山(具体的内容は既報済)の遂行に全力をあげて取り組んでおり、すでに



1988年(昭和63年)

1月号(No. 511)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

昭和62年度年次晩餐会	(1)
海外の山	(2)
「アンナプルナ南壁・冬」	
「カナダ山岳会キャンプ参加報告」	
図書紹介	(4)
「物理・山・ことば」「奥美濃」	
「生きた、還った」「日本200名山」	
「マロリー追想」「山の心・道しるべ」	
三国合同登山会員募金応募者ご芳名	(7)
ビッケルの渡来と製作(追記)	
広瀬 潔	(7)
東西南北	(7)
「東トルキスタン、西トルキスタン」	
「徳高月明」「大姑娘登高」「三水会現地集会」	
京都集いに150人(報告)	(8)
報告	(8)
総務委、福岡支部、越後支部	
新入会員・住所等変更	(10)
会務報告・ルーム日誌・会員異動	(10)
「山岳」第82年訂正	(11)
お知らせ	(11)
三国登山隊事務局、科学委、図書委	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話

234 六六五九

遠征隊員も決定し、二月から三月にかけて出発の予定であること、またこの遠征に対する会員各位のご支援、募金に対するご協力にあためて感謝すると述べ、会長自身ベースキャンプまで出向いて、隊員の士気を鼓舞したいと報告した。

次に会の現況報告として、現在の会員数は四、三六〇名に及び、会員番号は一〇一九〇番に達していること、また、二十一ある各支部の活動もますます活発化しており、会長自身、今年はいくつかの支部の行事にも参加し、有意義な時を過ごしたこと、なかでも秋の京都大会(全国支部懇談会京都大会)では、若い会員が積極的に参加している実状を目のあたりにして、大変感動したことなどが報告された。

次いで、会長より物故会員に対して哀悼の意が表され、司会者より報告された十三名の物故会員に対し、全員で黙禱をささげた。

河本清(四〇六)、辻莊一(四八七)、水越誠一(一一二〇)、岩崎昭一(四五三八)、服部鉦一(一四二四)、江波戸俊弥(二一六八)、北出篤吉(七七九)、前田昌晴(一四九三)、富士季夫(七九六三)、奥貞雄(一四三三)、牛窪浩(八八四六)、新谷栄三郎(六一九三)、山崎金

次郎(八七二)

永年会員の発表

本年度は名誉会員の推挙については、さきの評議員会で該当者なしと決定した旨、会長より報告されたが、在籍五十年以上で、本年度永年会員になれる方が発表された。竹節作太氏、奥田五郎氏、青木昇氏の三氏で、ともに一九三七年(昭和十二年)に入会された方々である。会長から青木昇氏に永年会員章が授与された。(竹節、奥田の両氏は欠席、なお永年会員の略歴は別掲)

◎青木昇氏の挨拶(要旨)
本日は永年会員のバッジを殿下ご出席の年次晩餐会でいただき有難うございました。

私の山の最盛期は太平洋戦争勃発の昭和十六年でありましたが、それから三十三年まで私は勤務の都合で東京にはおりませんでした。会には充分な貢献ができなかったことを残念に思っております。

一昨年、会の八十周年記念祝賀会が椿山荘で挙行されたとき、日本山岳会の創立と同じ明治三十八年生れのわれわれ何人かの会員に、ス波特ライトを当てられたのをおぼえております。

あと十八年もすれば、日本山岳会は百周年を迎え、そのときは大祝賀会が開かれることでしょう。月日の経つのは早いものですから、ガンにでも捕まらなければ、

私もいつのまにか百歳を迎え、健在で、その祝賀会にでも出席できるようなことにでもなれば、同年の島田巽さん達と一緒に、さぞ愉快な思いをすることになるだろうなあと考えております。

新入会員の紹介

本年度新たに入会された会員が、司会者よりアイウエオ順に紹介されて登壇した。ちょうど壇上の中ほどに、もちろん浩宮さまも他の新入会員十一人とこいっしょにお立ちになられた。そして司会者が、「新入会員を代表して、徳仁親王殿下にご挨拶をお願いします」と申し上げると、場内からドット拍子が上がった。

浩宮さまのご挨拶

このたびは、日本山岳会に入らせていただきまして有難うございました。

日本山岳会が国内はもとより、海外へもたびたび遠征をし、数多くの輝かしい記録を立てておられることはかねてからうかがっておりました。また今日は遠征にも参加され、また山を愛し、多くの経験をつんだ方々と、このような形でおいでできますことを大変うれしく思っております。

海外の山

アンナブルナ南壁・冬

アンナブルナ1峰(八〇九一m)をヴァリエーション・ルートの南壁から目指していた「群馬県冬期アンナブルナ1峰登山隊」からの一報は、冬期初登頂の成果にも関わらず悲痛なものだった。十二月二十日午前三時、最終第四キャンプを四人のアタッカーが出発した。山田昇、斉藤安平、三枝照雄、小林俊之の四隊員である。十二時間以上、厳しい闘いは続いたのだから、午後三時十七分、ついに頂上はおちた。

三年ぶりの挑戦だった。八四〇八五年の冬、八木原隊長以下ほぼ同じ顔触れの群馬の山男、山女たちは、一九七〇年、クリス・ボニンソン率いる英国隊が二ヵ月をかけて登った南壁ルートの冬期初登頂を目指してこの山にきた。結果は若手隊員の不振と予想外の降雪のため七二〇〇m地点で断念、三年後の再挑戦を誓ったのだった。「技術的には決して登れないルートではなかった」と当時八木原副隊長は報告している。

アンナブルナはモリス・エルゾーク以下のフランス隊が一九五〇年におとした人類初の八千m峰として登山史に永遠に名を刻まれているが、ボニンソンたちの南壁登攀もヒマラヤに「壁の時代」を拓いた画期的なものだった。(下山途中、メンバーの一人が雪崩で死ぬ事故があった)八木原隊長を中心とする群馬県山岳連盟隊はそれを冬に登るという野心的な登山を試みたのである。

登山行動の詳しい経過は十二月末現在わかっていないが、留守本部にカトマンズから入った連絡では四人が下山にかかって間もない午後四時四十五分、七九〇〇m付近で小林がシユカブラに足を

取られ転倒、弾みで雪壁を滑り落ちてしまったらしい。さらに八時〇三分、第四キャンプのわずかに二十m手前の急なルンゼで斉藤が滑落、行方を絶ったという。ヘリコプターをチャーターしての捜索も甲斐なく二人は絶望視された。

執念の難ルートをこなしての冬の登頂にどんなに隊員たちは湧いたことだろう。そしてその直後下山時に続けて起きた滑落事故の悲報。

アンナブルナ南壁には既にいくつかのバリエーションが刻まれている。その一つは一九八一年八月、吉野寛率いる日本のイエティ同人数隊による中央岩稜ルートである。当初、イギリス・ルートの右手のリッジをねらっていたが、ポーランド隊に同じ年の春先を越され未踏の中央岩稜に的をしぼった。二ヵ月にわたる激しい登攀の末、柳沢幸弘、青田浩の二人が登頂、次いで二次隊の加藤康二、遠藤晴行が頂上を目指したが、ルートを間違えて下山の途中、加藤は行方を絶った。今回の冬期登頂と言いつ、ヒマラヤ登山史の中で重要な位置を占めるアンナブルナはいつのまにか日本人にとっても忘れることの出来ない山になっているのである。

二人は帰らなかったが、それにしてもよく登ったと思う。「壁の時代」を切り開いた巨大な南壁を新たに「壁の冬の時代」とした。登頂者の一人、山田はこれでエヴェレスト、K2、カンチェンジュンガ、ローツェ、ダウラギリ、マナスルを加え、八千mを七座九回登ったことになる。

より厳しいものを求めて人間は高い所に登り、壁をよじ、八千mに目を転じ、いまや最も寒い冬にわざわざそのバリエーションを探っている。フリー・クライミングの世界にも通じることかもしれないが、そういう行為を見出すクライマーというのは何という厄介な遊びに魅入られた存在なんだろう。

(江本嘉伸)

海外の山

私も幼少の頃から山登りを始めましたが、自分の身体を鍛えることもできることながら、登山を通じて大自然と触れることに、大きな魅力を感じております。私は今後とも山登りを続けてまいろうと思っておりますが、日本山岳会の会員の方と一緒にする機会があればと思っております。

私は今、この日本山岳会に入っていたことと、それから近い将来、ぜひその山頂をきわめたいと思っております。「富士山」のテーブルに着かせていただきましたことに、二重のよろこびを感じております。(場内ドット笑い) どうぞこれからも、ご指導のほどをよろしくお願いいたします。(拍手)

乾杯

乾杯の音頭は、元会長の西堀栄三郎氏が務めた。西堀氏は乾杯にさきだって、次のように述べた。「たゞいま、徳仁親王殿下には、いいご演出をいただきまして、私もかつて新しく入会させていたことがあったわけでありすが、その気持を思い出すようなお話をいただいて、大変うれしく存じます。

以来、日本山岳会は、ご承知のとおりの大変な発展を遂げてまいり

ましたが、これはひとえに、会員の皆様方の大変なご努力によるものでございますが、登山とか探検的精神というものが横溢いたしますと、その国の発展というものは輝かしいものがあります。それは単に登山だけでなく、科学、技術に、あるいは産業そのほかに、有効に働いていることは事実であります。今後ますます日本山岳会が、この方面におきまして、発展いたしますことを心から願っています。

徳仁親王殿下のご健康と、皆様方のご活躍を祝して乾杯といたします。

乾杯のあとは、席を離れることなく、各テーブルごとにながやかな会食と懇談に入った。各テーブルには、ほぼ一人ずつ三国友好登山隊員も加わっていて、テーブルマスターのリードで、自己紹介や山の話が続いた。

三国友好登山隊員の紹介

去る十月に発表された、日本側隊員の紹介が行なわれた。隊員は壇上に整列し、実行委員長の大塚副会長より北側ルートの隊員から順次紹介され、和気あいあいのうちに、出席者の激励を受けた。

(日本側隊員の経歴その他は会報五〇九号を参照された)

再び歓談の続くなか、七時四十分頃、なごやかな雰囲気の中、山男たちとのご歓談にすっか

海外の山

カナダ山岳会 キャンプ参加の報告

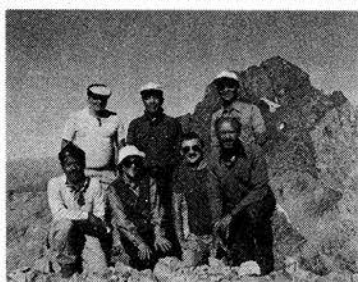
海外委員会より紹介のカナダ山岳会主催キャンプに本会会員三名、他二名が一九八六年九月十九日〜二十六日まで、カナディアン・ロッキー・オハラ湖畔のヒュッテに泊りながら、周辺の山に登ったり、トレッキングを楽しんで来られました。個人参加のこうした交流は、今後益々盛んにしてゆきたいと思っております。参加者のお一人、原謙一氏にキャンプ生活の原稿を頂きましたのでご報告をかねてお知らせ致します。

参加者(会員) 山崎健、原謙一、荒木正弘。(会員外) 金坂一郎氏夫人、その友人。現地より日本人通訳一名。

(海外委員会/係 黒川恵・早川瑠璃子)

カナダ山岳会インディアンサマーキャンプに参加して九月十九日より二十六日までカナディアンロッキー・オハラ湖畔の山岳会ヒュッテに滞在し現地メンバーと共にキャンプを楽しんで来ました。

オハラ湖は十九世紀末、カナダ鉄道局の関係者であるアイランドの海軍中佐、オハラ氏によって開発され、山



S. オダレイ山頂にて/撮影・荒木正弘

岳公園としての素晴らしさを紹介されたのでこの名がついた所で、この地域は針葉樹に囲まれた美しい湖の他に、氷河湖も含め大小二十五以上の湖があり、

盆地状になった標高約二千呎の所に位置しております。周囲は三千から三千五百呎クラスの、全く植物の生えない岩山で、地形によっては頂上付近に氷河のある峰もいくつか含まれていて、実に素晴らしい地区です。また大小動物、鳥類も多く生息していて、全く人を恐れず、われわれの目を楽しませてくれる距離にいます。特にウィスキージャクと愛称のあるカケス等は、手に持った餌を見せると必ず飛んで来るほど人なつっこいのです。

夏の最盛期だと花もたくさん咲いているはずだが、残念なことにわれわれが行った頃は、シーズンを過ぎていて、わずかに咲き残ったものが見られるだけでした。樹は殆んどが常緑針葉樹ですが、いくらか唐松も混っていて、ちょうどこれが黄葉の時期で、鮮やかな黄色に輝いていました。

オハラ湖は一般ハイウエーから約十二・奥へ入った所であり、一般車は全く入ることが出来ません。ハイウエーの分岐点に駐車場があり、一般車はそこへ置いて、専用のバスに乗り換えて行くこととなります。ボンネット付きの古いガタガタのバスで、もちろん道路は舗装もしてない砂利道です。それも一日三本の運行だけ、日本のようにゲートがあっても、許可のステッカーを付ければ営業車でも何でも通れる所と全く違っています。

また面白いことにこのバスは、犬も一緒に乗ることが出来るのです。犬を連れて来ているハイカーも何人か見ました。しかし犬は動物を追いかけないので自然保護の面から見ると、良くないとのこと、八八年からは禁止になるようです。

このルートから入らない場合は、どこかの峠を越えて、日数をかけねばなりません。しかも地図には登山路も無いので、適当な所を見つけて歩いて来なければなりません。

オハラ湖畔には予約制ロッジが一軒と監視員小屋、更にそこから五百メートル離れたアルペン牧場にカナダ山岳会の小屋「エリザベスパーカーハ

りおくつるぎになられた浩宮さまが、拍手に送られて、お名残り惜しくご退席になられた。

このあと、なお歓談が続いたのち、全国の各支部からの出席者が勝山理事によって、南から順に紹介された。

そして、この記念すべき年次晩餐会も八時三十分閉会となり、出席者は新刊の「山岳」と「山日記」を受けとって散会した。

(写真・武居台三)

／記事・松家晋

〔新永年会員紹介〕

竹節作太(一九九六番)

明治三十九年四月十七日生

早稲田大学卒

紹介者 石川欣一、宮崎武夫

奥田五郎(一七〇二番)

大正三年一月二十八日生

北海道帝国大学卒

紹介者 犬飼哲夫、松方三郎

青木 昇(一七二二番)

明治三十八年十一月二十九日生

早稲田大学卒

紹介者 中村テル、村尾金二
〔永年会員となつた感想〕

▼竹節作太氏

「スキーの古傷のため山に登れないのが残念です。今は麓から見上げるのが楽しみです」。

▼奥田五郎氏

「いつのまにか年月が経過してしまいました。旭川近郊の低山を歩いて楽しんでおります。エゾシカ、キタキツネ、エゾリス等にはしばしば出会います。もう冬になりました」。

▼青木 昇氏

「入会後、遂に半世紀経つたのかと感入。昭和十七年より三十三年まで東京不在もあり、JACに貢献出来なかった自己の非才と怠慢を識る。

ほとんどのアルピニズムの上での、また、われわれの愛するクラブとしてのJACの益々の発展と充実を心より祈念す」。

物理・山・ことば

木下是雄 著

本書は「木下先生の古稀記念」に編まれたと後記にある。学習院大学の学長四カ年の後、名誉教授となられたのだから、古稀あえて驚くにあらぬとしても、あくまで前向きで若さにあふれる内容に

海外の山「ット」があります。何れも丸太造りで、自然に良調和して建てられております。カナダの観光はカナディアンパシフィック鉄道と共に開けてきたので、このロッジもルイズ湖畔の立派なホテルも全てこの系列のものです。そしてこの山岳会の小屋も、二十世紀初めに鉄道会社

が十数棟建てたもののうち二棟が残り、そのうち片方はキッチンや暖炉があり、もう一方は、床があつて泊れるだけの補助的なものです。中は何れも日本で昔から見られる上下二段のザコ寝スタイルの小屋で、特にベツト形式になっているわけではありません。ただゴザの代りにマットレスが敷いてあるだけで、各自持参した寝袋で寝るようになってます。

食事は山小屋だから簡単かという、段ボール箱に詰めて何個も持つて行き、一般家庭と全く変らない感じでした。

朝はオートミル、パン、ホットケーキ、ビスケット等々数えきれないほどです。

昼は各人各様にサンドイッチを作り、副食、フルーツ等適当に持つて行く程度でした。

夜もまた豪華で、ステーキ、ローストビーフ等食べきれないほどのメニューが毎晩続きました。

肉類は冷凍した大きな固まりを、発泡スチロールの箱に入れて持つて行き、冷蔵庫が無い所でもしばらくは大丈夫でした。

小屋の飲料水は川の水ですが、汚れた水は絶対川へ流さないのが原則です。お勝手手洗水はもちろんのこと、洗面の水等、全てバケツにためておいて、近くに穴を掘り、濾過して捨てるようにしています。

燃料は薪とガソリンを半分ずつ使っています。小屋の周りに倒木がいくら

あつてもそれは使わず、遠い所からヘリコプターで運んできたものを使っているようです。

登山コースはオハラ湖を中心に周遊コースや放射状の登山コースなど、いくつもの良く整備されたものが出来ています。そして分岐などには必ずわかりやすい導標があり、腐蝕しないようプラスチック製でできています。一般トレイルの方は、杖を使う人でも登山靴でない人でも、楽に歩けるよう実に良く手入れがされています。岩場コースには、コースごとに色を変えたペンキマークが付いていました。しかし高所になると、「何々方面アルペンルート」と登り口に導標があるだけで、道は全く整備されておらず、自分達で捜しながら判断して登るほどでした。

登山形式は皆でいっしょに同じ山へ登るのではなく、メンバーのレベルにあったコースを選んで、適当に分かれて行動します。或るグループは草原・高地・湖めぐりを楽しみ、また或るグループはピッケルやザイルを持つて、氷河を越えて岩山登山を楽しんだり様々です。従ってどんなレベルの人達も、自由に参加することが出来て、今回も三十代から七十代まで幅広い人達の参加でした。殆どどのコースが小屋から日帰りで歩けます。もともとカナダは日本より北にあり、夕方八時になつても明かるいので、遅くまで歩けます。

稜線の良い場所には、石造りの立派な山小屋もありました。これも山岳会の所有で、中はキッチンの設備も整つていて、冬期でも充分使える小屋でした。従つて無理に日帰りコースを選ばなくとも、ここを利用すれば更に高い所も楽に登れるわけです。このような小屋が稜線上に何箇所もある



図書
紹介

次代に残そう美しい山と溪

海外の山

は、舌をまかすにはいられない。六百編にも及ぶ旧稿から、著書と編集委員会とで精選された三十一篇が七章に分けられて、書名の順に配列されており、冒頭の「物理はたのし」から読むべきところ、つい第二章の「山もたのし」のページを開いた。スキーマの達人として知られる著者の「ことはじめ」時代なので、関温泉、五色・青木小屋、吾妻小屋……の話になると、なつかしく往時が私にも回想された。

しかし、次の「おくゆかしい頂上」では、もう単なる回顧ではない。雪の鳥海に三度挑んで果たせなかったのを、なお「登るべき頂上をもっているのは楽しい」とされるあたり、まことに爽快である。

「南極行」については三十余ページが当てられている。わが国の第一次南極観測隊より一足先きに、一九五六―五七年度の米国隊に単独参加して、ウェッデル基地へ赴いた折の体験が中心で、事始めころの観測基地の情景が、くわしく描写されている。この章に「アイク・シユロスバツハ」という一篇がある。著者が半年近く寝食をとめた仲間が当時六十五歳、極地行十回に近いヴェテランのプロフィルが実にみごとに活写されている。

本書の後半部は「外国とのつき合い」、「言語技術」、「私の教育編」、「研究者の世界」の四章から

成り、著者の永い教育現場での体験をふまえた貴重な発言が、みちあふれている感じである。なかでも、若い人々を国際人に育てあげるには、なにが最も大切かを、科学者らしい整然とした論述で強調しつつ、これからの教育の「受信型から発信型へ」の転換に努力を集中すると言明されるあたり、読者としても、心から期待を寄せたくなる。この木下提言は、すでに今日ひろく各方面の関心を集めつつあるので、本書の刊行を機に一層拍車のかかることを願う。

順序が逆になったが、ここで私は巻頭のエッセイ「私と物理学」へと戻った。そして感じたのは、やはり、この文章から読むべきだったということだった。著者の人となりが、実にあざやかに描かれているからである。

一九八七年九月刊 新樹社 三〇二ページ、定価一七〇〇円 (島田 巽)

奥 美 濃

ヤブ山登山のすすめ

高木泰夫 著

「アルプス的登山志向者と、ヤブ山登山志向者は棲み分けている」。そして、「ヤブ山登山には、スポーツ登山とは異なる日本古来の山岳信仰的なものがある」とは、著者が本書冒頭で記すところである。このように指摘されてみ

海外の山

ようです。われわれが滞在した一週間は、幸い天候に恵まれ、一日も停滞することなく、毎日、周りの主なルート歩くことが出来た。気候は朝で零度、霜柱が立ち薄氷が張る程度でした。しかし日中は二〇度を越えて三〇度近くまで昇り、裸でも歩けるくらいでした。現地の人の中には、日向ぼっこをして、湖で泳いでいる人もいました。但し水温を測って見たら一二度でした。

稜線の高い所からの眺めは、どちらを向いても裾は延々と続く針葉樹、その上にもものすごく切り立った岩峰、またある山は大きな水河をのせている、カナディアンロッキー独特の風景です。

遙か南方には有名なアシポニー、パカブー山群なども眺めることが出来ました。

時期が少し遅かったので、現地の一般登山者も比較的少く、毎日、数パーティにあっていただけとても静かな山登りを楽しむことが出来ました。非常に景色の良い所ですので夏期はかなりの人達が来るようです。

話は少し飛びますが、オハラ湖から約十。北に、カナディアンパンフィックのループトンネルがあり、一本の列車が同時に三カ所見える所があります。上越線の清水トンネルと同様のループですが、あらためてカナダの列車の長さ、国の大き

ると、確かに、ヤブ山たるこの奥美濃へ通う知人を思い浮かべてみると、その誰もが、何だか神がかった見えるから妙だ。

奥美濃は、標高一〇〇〇を越す山、約四〇座を擁する山城である。勿論、林道は山奥へ延び、登山道や峠を見かけますが、ここでは、その役目が終れば数年を経ずして野に還ってしまう。だか

さを思い知らされました。

カナダでもやはり高山植物を踏みつけて歩いたり、自然破壊の行為をする人々が皆無とはいえないようです。一応パンフレットを配ったり、看板をたてて自然保護にとり、監視員も毎日見廻りを行なっております。そして壊れやすい自然環境をいつまでも美しく保つために訴えております。日本と同じです。

カナダ山岳会各地の山小屋の他にバンフにメインのクラブハウスを持っております。ここに宿泊して車を利用すると、かなり広範囲の山登りが出来ます。このクラブハウスには管理人が常駐していて、山岳会のマーク入りの物品の販売も行なっております。宿泊はやはり自炊形式ですが、備品は全て揃っているの、食料と寝袋を持って行けば泊れるようになっています。一般の人でも少し料金は高いが利用出来ます。実にうらやましい次第です。わがJACもこのように、登山者が気軽に利用出来る小屋があちこちの山に出来れば良いと思います (原 謙二)



海外の山

ら、ヤブが雪に消える積雪時、とりわけ春先の残雪期こそが登山の最適期である。それ以外の季節は、手ごわく敵対するヤブを避けて無二分けながら山頂を目指すのである。著者は、その奥美濃詣でを一九七〇年代になって精力的に始められたという。本書は奥美濃の山を中心として、白山北方の榎嶽山・猿ヶ馬場

山から、南は関ヶ原を越えた養老山までの主だった七〇座を扱い、かつて岐阜日々新聞などに発表されたものを主体に、「ヤブ山登山のすすめ」、「奥美濃―山と人」、「奥美濃の歴史、信仰、伝承」、「登山、そして案内」の各章にまとめられている。研究あり、随筆ありと盛りたくさんの内容で、あたかもヤブ山を縦横無尽に歩き回

るがごとくに軽妙な筆さばきで、読むものをして思わず笑いに誘い込む。

なお、本書の「登山、そして案内」は、かつて上梓された「ぎふ百山」(岐阜日日新聞、昭和五十年七月発行)、「奥美濃」(同人山葵会、昭和五十年二月発行)からの再掲である。著者は本会岐阜支部に所属し、大垣山岳協会副会長でもある。

昭和六十二年十月刊 ナカニシヤ出版 B六判 二二六ページ 定価二〇〇〇円

(安藤忠夫)

生きた、還った

R・メスナー著
横川文雄訳

本書はメスナーが十四の八千峰をことごとく登って、生きて、還ってきたという本である。彼の多くの著書の中に、既にここにある登山の幾つかは発表されているため彼のヒマラヤでの驚異的な活動は広く一般にも知られている。しかしあらためて、十四の巨峰を、彼の言う、出来るだけフェアーなスタイルで登った記録として一冊の本で読むと、彼の偉大さにつくづく感心する。

さて本書の構成は、十四の山を登攀順に書いてあり、それぞれの山の登攀史の最も重要なデータとして一ページの年表をつけ、その隣りのページにメスナーの登攀し

たルートがイラストで書かれている。さらに六・七ページが大きな山の写真にあてられ、最後にメスナー自身の文章と、彼と同行した僚友のアルビニストたちの文章、写真を七ページにまとめ、一つの山行の記録にしている。

八千峰の登攀記録となるとたいてい大部を一冊を読むことになってしまいが、本書はそれを十五、六ページにしてあり、写真もすぐれており、大変小気味よく読んでもしまいい、退屈しない。

さて文章の方は短かいため一気に読んでしまいが、いわゆる登攀記録ではなく、それぞれの山に登るに際し、メスナーが考えた独創的なアイデアを中心に登攀の様子が書かれている。そして当然ながらメスナーは自分のことだけを書けば、登攀記録になってしまう——メスナーのパートナーはいつもあと一人か二人である。これが彼のスタイルなのであり、彼の生き方の証明なのだと思う。そのため、本書の中でも再三ふれられているが、世間の冷い興味の的にされてしまっている。とはいえ八千峰を二人か三人で、時には数日で登攀した記録を読めば、彼の偉大さが理解されると思う。

「明日から八千峰後の時代がいよいよ始まるのだ」と冒頭で述べて、メスナーは次の活動を予告している。

一九八七年八月刊 東京新聞出

版局、定価六三〇〇円

(中田 茂)

日本200名山

深田クラブ 著

深田久彌氏の名著『日本百名山』はあまりにも有名で、既に百名山に登り終えた人も多いと聞く。この本を目標に百名山登頂を目指す山の愛好家の集り深田クラブは、この百名山に登ることを目的として、昭和四十九年に発足した会であった。

深田氏はその時、既に他界されていたが、深田久彌氏の業績に共鳴した人達で、深田フアンの全国的組織を持つ会として十年間を歩んだ。昭和五十九年に十周年を迎えて、何か記念事業をしようと思いたち、会則にうたわれていまだ果せなかった「日本二百名山」の選定をすることになった。

なぜ二百名山を思いついたかについては、この本に熱意を持っていた小倉会員が、日本百名山以外に選び残された不遇な山々が沢山あって、深田氏はそれらの山々を百名山に選定できなかったことに對して、申訳ないといっておられたそうで、選び残された山は四十数座あったので、これに足りない分を選定して、深田クラブの二百名山にすることにした。北は北海道、南は九州と、とり残された山の中から、風格、歴史、個性、高

さなどの観点から、目標の山々についての選定に對し、選考委員会を設置して、各人各様の意見を聞き、それぞれの地域での不遇な山、最近、道が整備されて登れるようになった新しい山々を選定し、漸く二百名山に達したということである。

こうして選定した山を歩き、写真を集め、地図を入れ、文を揃え一頁ずつ見やすく組まれたこの二百名山は、まことに見良、山の姿がわかり、地域別に順序よく記されているので、自分の行きたい山の予備知識が得られ、計画を立てる時の案内書にもなるだろう。また百名山を歩き尽した人々には、次の新しい目標ができて新たな意欲が湧くことと思う。

一九八七年九月刊 昭文社 価一九八〇円

(坂倉登喜子)

マロリー追想

ダヴィッド・パイ著
杉田 博 訳

マロリー神話の生まれた背景をたどれば、そこにエベレストがあるからである。日本山書の会の「山書研究31」として翻訳されたパイのこの本は、マロリー伝の最初のものであり、その後陸続と現われるマロリー文献の基礎をなすものである。訳者は出版に際し「今さらの感がしないではない」と書いているが、原書は既に手に

入りにくく、島田氏の『遥かなりエヴェレスト』やD・ロバートソンの『ジョージ・マロリー』(山洋社・一九八六年刊)とともにマロリーを知ろうとする者に貴重な一冊となろう。

チベット側からのエベレスト登山が再開されてマロリーとアーヴィンの最後の行動が再び注目を集めている。日本も含めた各国登山隊の見解を総合した新説も本になった。(First on Everest: The Mystery of Mallory and Irvine, by T. Holzel and A. Salkeld, 1986, Henry Holt)

なお「山書研究31」は『マロリー追想』として三百部の上製本が用意されている。

一九八七年三月刊 日本山書の会 上製本価三三〇〇円

(児玉 茂)

山の心・道しるべ

久米 準 著

担任の児童を前にして、社会科地図帳に記載のある山(二四二山)は全て登る、と約束した著者は、とうとう目的を達した。その記念に、山で体験したいくつかの話をこの本にまとめた。

このようにしてまとめた十一話の冒頭に、著者はその話のねらいを枠で囲って示している。

動物が好きらしい著者は、自分の発案から食料用に生きた鶏を連

れていくのだが、結局、情が移り、仲間とともにそのまま山から持ち帰る、といった話など、面白い話、悲しい話が折り混ざってある。なかには落石で打たれた学生が、著者の腕のなかで死んでいく

三国友好合同登山会募金応募者ご芳名 (十二月十四日現在、一口五千元)

(一〇口) 大森薫雄。(六口) 田口二郎、澤村幸蔵、婦人懇談会有志一同。(五口) 小原勝郎、宇部と。 (四口) 坂口三郎、佐近丸彦、浜口欣一。(三口) 佐藤敏彦。(二口) 野口末延、田中榮蔵、関口正次郎、中島正夫、岸栄、入沢郁夫、高島法男、石原國利、梅野淑子、柴田巖太郎、伊佐九三四郎、児玉茂、入谷浩右、轟新一郎、麦倉啓、横田明男、横山宏太郎、高澤英雄・佐恵子、河合文恒、児玉俊子。(一口) 山本元、中保、鶴岡元之助、山口俊輔、石田稔郎、名児耶達男、林稔、三枝明德、安土武夫、中山啓司、加藤一、垣内雄治、井上信義、中井義

博、松沢君子、加藤利徳、朝倉英子、佐藤紀子、屋敷具子、八木原弘和。
(累計一、三六六・二口、五五四名、金額六、八三一、一〇〇円)

●日本・中国・ネパール
一九八八 チョモラン
マ／サガルマタ

友好登山隊壮行会開催

日時 二月六日(土) 午後六時
場所 ホテルニューオータニ

きりの間
社団法人 日本山岳会
社団法人 日本山岳協会
読 新 聞 社
日本テレビ放送網

東トルキスタン、西トルキスタン

川崎 精雄

ゴビ灼けて城址の空に鳥を見ず
カレーズを秘めたる砂漠日の盛

夏雲や野に漸続の長城址
垣間見る天山雪か梅雨雲か
アンタレス燃ゆる砂漠に興亡史
民族舞踊青き葡萄の柵の下
汗血馬駆けりし原野棉の花
カンナ燃ゆる帝帖木児の眠る廟
飛行機の影日盛りの赤砂漠

ピッケルの渡来と製作(追記)

広瀬 潔

「明治四十二年頃ヨーロッパから帰国したある学者がみやげに持ち帰ったピッケルを、中村清太郎が東京で模倣して、後立山登山に使った旨」を記述しておいたが、直後、愛知県豊田市の杉本誠から「当時の珍しい写真(写真A)が贈られてきた。右はその「模倣ピッケル」を持った中村清太郎、左はその「みやげピッケル」を携えた三枝威之介で、明治四十三年七月、後立山で辻本満丸が撮影したもの。(会員番号は辻本二〇、三枝三五、中村一五三で、三人とも後に名誉会員)。日本で撮影された「ピッケルの写真」としては、残存している最も古いものではないか。
(注) 杉本誠は古い山岳写真収集家。その個展については「山五〇七号」望月達夫寄稿文参照。



写真 A



写真 B

左手になる白い紙又は布には「日本山岳会員辻・三枝・中村」と認められ、この写真の由来を証している。
(平柳一郎)

三枝威之介は当時この「みやげピッケル」を借りてあちこちの山に持ち歩いていたらしい。静岡支部会員長田義則からも貴重な文献(昭和三十九年十二月発行「山岳展望」所載の中村清太郎寄稿文ゼロックス版)が贈られてきたが、それによると、前年(明治四十二年夏)小島島水・高頭仁兵衛・高野鷹蔵・中村清太郎・茨木猪之吉が南アルプス赤石山脈に登った時も、三枝威之介はこの「みやげピッケル」を借りて、一行に加わっている。
(付記) 「みやげピッケル」を持ち帰った学者の「氏名」が知りたい。また「みやげピッケル」も中村の「模倣ピッケル」もともに現在行方不明。ご存じの方は一報されたい。
(参考) 一八八二年(明治十五年)イタリアのV・セツラがマッターホルンを撮影した時の添景人物写真で、当時の「登山姿」や「ピッケルの形状」がよく分かる貴重な古い写真(写真B)。(杉本誠提供)
(以上歴史的記述につき敬称略)。

(注記) 写真Aの三枝威之助のピッケル(ある学者のスイス土産)は左側がビックで、下側のキザミが鋸の歯のように突出して黒くみえる。右側のブレイドの刃は直線のような。これは初代エルクの特徴である。写真のピッケルがエルクだとすると、明治四十三年の加賀正太郎のエルク(大町博物館収蔵)は年代的に日本に持ち帰られた二番手のものとなる。また、中村清太郎は胸の中央に山岳会の三角形のバッジをつけ、三枝の

タマリスク咲けり砂漠に消ゆる
河
西瓜売る老婆の後ろアム・ダリ
天山の雪水引ける街緑

穂高月明

小林 碧郎

岩紅葉して園谷に瀧音澄む
竜胆や穂高の霧にひた濡れて
滝谷の常湧く霧に月冷えて
岩屑を溜めし滝谷月下なり
落石音滝谷に月差し入らず
月出でて石組たかき穂高小屋
なななまど穂高裏岩しろし
岳裏に苔桃熟れて霧さむし

大姑娘登高

——中国四川省の山に登る——

伊佐 九三四郎

羊逐ふ牧童の声天に消ゆ大姑娘
花園の中
山生れぬ大姑娘の麗峰は白き衣
をなびかせてをり
雪の峰瞬時に姿かくしたり大姑
娘は誇り高き山
アラスカの山に似たると人のい
ふ大姑娘は雪白き山
四つの峰四人娘にたとへたる里
人の心いとやさしかり
草の原あまりに多き花なれば踏
みしだきつつ山を往くわれ
波うちてエーデルワイスのいや
白く歩めど尽きぬ広き原あり

花の梅陽に親しみてまどろめば
心はやりて頂に立つ
どうどうと滝落つる音あり大姑
娘山ふところに迫る日の午後
大姑娘の四つの峰を望みたりもろ
き岩場をつめて立つコル

大姑娘の頂いま立てり大姑娘
を指呼の間に見て
不可思議なことよともによる
こべり登頂の日のみ快晴の朝
針葉樹林尽きたる谷にポツネン
と石の小屋あり鳥の声消ゆ
石小屋にて一杯の茶をふるまは
る身振り手振りの体話楽しく
B・Cを徹収せる朝雪来たる大
姑娘も白く装はん

ふりかへりふりかへりつつ山を
去る大姑娘山群いつの日かまた

三水会現地集會報告

奥秩父・小川山

小川山は峻しい……とは知人から
聞いていたが、手許の五万にもハ
イキングシリーズにも、このコー
スは全く記されてはいない。
十月二十四日夜の金峰山荘は激
しい雨で、予報も雨だった。
一年ぶりのエーデルワイス・ク
ラブ一同と地酒を頂いて天気の変
復を祈りながら休む。

翌日：

祈りが聞かれたのか小雨後曇り
という予報……。小雨の中、峨々た
る山波と最高の紅葉を散見しなが
ら六時三十五分出発。連続する巨

報告

京都集會に百五十人

六十二年度の全国支部懇談会京都集會が十月
三十一、十一月一日の両日、京都・滋賀両地区
にまたがって開かれ、記念講演、懇親会、紅葉
の比良登山に全国の会員百五十人が参加した。

開幕の記念講演は午前中の事務担当者會議に
続いて京都・本願寺會館で十月三十一日午後一
時から始まった。講師の桑原武夫さんは文化勲
章受賞が決まってから初めての講演。開演に先
立ち、女性で初めて八千のマンナス頂上に立
った、京都支部の内田昌子さんから花束を贈
り、山岳会からのお祝いとした。桑原さんは京都
の文化を近代アルピニズムの発祥に絡ませ、時
にはユーモアを交えた語りで参加者に深い感銘
を与えた。

懇親會場の滋賀・比良山麓の「山の家」には
バスで移動、久我文子さんから女性支部会員によ
る野点のお茶の接待のあと、吉沢一郎名誉会員

の乾杯で宴に移った。メインディッシュは京都
支部自慢の牛肉の炭火焼き。別動班が昼前から
取り組んでおり、全員が到着したころには一〇
〇*を超すモモ肉二本がこんがり焼けていた。
サラダをつけて食べるブラジル風の味付
け。ほかにシチエウ、野菜サラダなど手作り料
理に人氣が集中、仕出し弁当には手をつけな
い人も多かった。豪華な焚火を囲んで全国大会ら
しい懇談の輪は夜半まで盛り上がり、歌声が途
絶えたのは夜も白みかけるころだった。
十一月一日は朝から四コースに分かれて武奈
ヶ岳（二一四〇）、釈迦岳（二〇六〇）、堂
満岳（二〇五七）、蓬萊山（二一七四）な
どに登山。各パーティともベテランリーダーと
ドクターをつける万全の体制、山頂付近では時
雨模様のところもあったが、琵琶湖の遠望と紅
葉をじっくり楽しんだ。夕方には全員無事下
山、「山の家」の本部で斎藤淳生支部長が集會
を成功させた全国の参加者に謝辞を述べ、今西
寿雄會長が「来年またどこかで会いましょう」
と締めくくった。
(四手井靖彦)

大な奇岩、朽ちかけた梯子、滑る
足許。八時過ぎには雨はやんだが
このコースの殆どが大きなシャク
ナゲであるから、この雨滴で全身
がズブ濡れである……、十二名中の
最後尾の私がこの有様であるか
ら、先頭の高田さんの労苦は大変
なものだったと思う。

登る人も稀であるから踏み跡も
随所で途切れ、ガスの中で視界も
無し。数年前に登られた高田さん
ナシでは登頂不可であることを体
得した。

頂上までに標識らしいものは
一カ所。それも小さなブリキ板に
矢印と小川山の文字だけという有
様。(※最近岩場として有名にな
ってききましたから、道も道標も整
備されるものと思います)。
小川山山頂着十一時十五分。所
要時間四時間四十分。不思議なこ
とに頂上では二十分ほどの青空も
出て萬歳三唱。

帰りは、登った道を降りたので
あるが、踏み跡とケモノ道の判断
がつかねたりしながらも、借り

年次晚餐會懇親山行

参加者 坂倉、遠田栄・篤子、高
田他八名 (遠田 栄)
報告・ほうこく・ホウコク

年次晚餐會の翌日行なわれてい
る懇親山行を一部予定を変更して

実施しました。

十二月の東京では珍しく雪となつた六日(日)朝、集合場所の湯河原駅前にて入沢委員より、生憎の悪天候のため当初の予定を変更する旨の説明があり、城山(五六二)へと出発。ツバキラインの途中まで車で入り、愛樹ノ碑あたりで下車。シトドノ箱を往復の後城山山頂へ。平らな広い山頂は晴れていればさぞかし眺望がよいことでしょう。山頂を少し下ったピクニックランド内の東屋にて昼食。先発隊がたつぷりのお湯とみそ汁の準備をして待っていてくれました。昼食の後、参加者の自己紹介と記念撮影をすませ、湯河原ならでは、枝にたわわに実らせたミカン畑の脇を通って城願寺へと下つてまいりました。樹齢八百年というビャクシンの大木を見学の後、湯河原駅にて解散。

参加者 (北海道) 横田春雄、柳田涼子、平野明。(秋田) 佐藤兼治。(宮城) 熊谷正志、熊谷藤子。(東京) 山口一孝、穴田雪江他一名、小松原一郎、河野幾雄、竹内佐郎、船木威志、吉田実、入沢郁夫、神山良雄、勝山康雄、堀嘉余

子、権藤太郎、藤井正彦、藤田礼子以上二十一名
(総務委員・藤田礼子)



年次晩餐会懇親山行・城山にて

多良岳山行

福岡支部

秋の山行は佐賀、長崎県にまたがる多良岳(九八五)、十一月七日、八日参加者二十八名の山行となった。七日の宿は有明海を眼下にみおろす眺望のよい「いこいの村・長崎」で、六時半から親睦会を催した。支部会員の他、佐賀、長崎の会員の参加もあり、おそくまで楽しい歓談がつづいた。

秋の親睦登山会

越後支部

新潟と長野の県境にある苗場山(二四五四)に昨年、秋山郷の大赤沢登山道が開闢された。当支部はその新道を登って苗場山の秋色を觀賞したり、山麓の景勝や温泉を楽しもうと、十月十七、十八日に親睦登山会を催した。折悪しく台風十九号接近の報せに、参加申込みの取消しが続出して、どうなることかと心配したが、十七日夕刻までに雨について小赤沢の秋山館へ集った三十余名の中には、東京や横浜から遠来の支部会員もあり、湯上りの懇親会は地酒の林立と山菜料理に話が弾んで、恒例の午前様も幾組があつたらしい。翌日は意外にも台風一過の快晴となり、登山班と遊歩班に分かれた一行は、爽やかな朝の光りを浴びながら出発した。硫黄川に沿って三合目まで車が入り、登りに約四時間を要する大赤沢コースは、よく手入れされて歩き易く、尾根の背を登るにつれて展開する景観も見事で、既設の各コースに較べても遜色のない道であった。今を盛りの紅葉を愛でながらも、路傍に鈴なりの山ブドウやサルナシ、きのこ等の山の幸に手が伸びて、みんなを喜ばせた。中津川を隔てた鳥甲山の岩壁が、鮮やかな彩りに映えていた。猿面峰から本峰へ

の急降急登で達した一等三角点の山頂は、なだらかに広がる草原にオオシラビソやコマツガの樹林を配し、青空を写した大小無数の池塘群の絶景に歓声が上がる。昼食は芝生のカーペットに全員が肩を寄せ合つて、缶ビールや酒瓶が巡り、山小屋の遊仙閣から豚汁鍋の差し入れもあつて、楽しく和やかな一刻であつた。そして何よりの収穫は遮るもののない雄大な眺望で、巻機山から谷川連峰、浅間、岩菅、妙高三山と上信越の山々から、北アルプスの槍、穂高、白馬山群と懐かしい山波が久闊を叙す。一同はあの山この山と指呼し、カメラを覗いては嘆息をあげていた。

帰路は小赤沢道を降り、夕闇の迫るころ秋山閣へと辿り着いたが、遊歩班とも全員が元気で、苗場山の秋を堪能し、親睦を深め合えたことは、実行委員として何よりの喜びであつた。

参加者 岩下光男、岩下香代子、江田宗友、大田邦介、上村幹雄、伊知地信人、伊知地鏡子、桑原梯治、坂井厚、佐藤徳松、斉藤弘、市島佳枝、高嶋良子、高沢スズエ、土田幸雄、竹内玲子、中川久、中村一雄、蒔沢庸昭、早川英夫、花井馨、室賀輝男、望月力、山崎幸和、柳沢一男、今成幸夫、藤井信、横山征平、土田利栄、渡辺忠司、佐藤一栄、山田勲(山田勲)

現代の冒険

<全2冊>

クリス・ボニントン著 田口二郎／中村輝子訳 人間は、あくことなく未知の世界への挑戦を試みて人類史を築いてきた。そのチャレンジ精神は戦後の冒険に凝縮した形で生き続けている。本書は、山・極地・河・海・空・洞窟・宇宙の七分野の冒険二〇を選び、その個性的で不屈な主人公たちに光を当て、極限状況において集中的に見せる葛藤と緊張と勇気とそして至福感を活写した魅力溢れる読物。

(全三冊) A5判変型・三三〇頁 定価(山)二八〇〇円 (河)二六〇〇円 (空)二四〇〇円

(山) 山・極地・河 ▼山Ⅱアンナブルナ／エウレスト／チョー・オユー／ボナッティ柱塔／ブロード・ビーク／アンナブルナ南壁／ナンガパルバット
▼極地Ⅱ南極大陸横断／北極横断／たった一人の北極行 ▼河Ⅱ青ナイル
▼付載Ⅱ冒険小史／用語解説 他 (河) 海・空・洞窟・宇宙 ▼海Ⅱコン・チキ号／大西洋ポート横断／二つの大洋を渡る／世界一周航海／単独無寄港
世界一周航海／アイズ・バード号 ▼空Ⅱダブル・イーグル号 ▼洞窟Ⅱ死んだ男の握手 ▼宇宙Ⅱ人類初の月着陸 ▼付載Ⅱ関連書一覽 他

会務報告

十一月理事会

11月10日午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚、村木副会長、嶋原、橋本、西村、大森、松永、小林、早坂、新井、関塚、大橋、織田沢、岡沢、鈴木、太田、浜口各理事、早川(田部井代理)、太田監事、松田、小倉各評議員

委任 勝山理事、山本監事

報告事項

▼財務 九月末までの収支報告ならびに九月末現在の貸借対照表に

基き報告が行なわれた

太田監事による中間監査報告

▼三国登山 十月十一、十二日、北京にて準備会談、重広、伊丹、貫田が出席

十月十五日、十六日、カトマンズにて準備会談、磯野が出席

十月二十五日、中国登山協会の三名が読売新聞と打ち合わせのため来日し、二十九、三十日に富士山でテレビ中継テストを観察、JACとしては三十日に夕食会をもうけた。

十月三十日から梱包作業開始

▼山研 十月二十五日閉所、昨年並の利用者があった

▼山日記 現在印刷中で、年次晩

東京・千代田・一ツ橋 岩波書店 振替〈東京〉6-26240

餐会で無料配布できる予定

▼図書 十一月二十六日、望月氏
の山岳図書を語る夕べ、この一本
展

▼自然保護 第十三回全国集会、
テーマに関して何らかのアピール
を出したい

▼横浜ウエストン祭(三月二十一
日)に、ウエストン・レリーフ、
著書、写真、スライドを貸し出す
▼集会 十一月八日、上州武尊登
山

十月三十一日、十一月一日、全
国支部懇談会京都大会

▼医療 昭和六十三年六月十一、
十二日、水上にて登山医学シンポ
ジウムを開催予定

▼学生部指導 学生部のあり方を
考える会を開いた

▼十二月二十四日、シンポジウム
「三国登山隊のタクティクス及び
防衛大隊チョモランマ報告」を開
催予定

▼婦懇 田部井代理(早川)が
「登山とトレッキングへのお誘

「山岳・第八十二年」訂正
表記「山岳」に掲載の島田
巽氏「ウエストン年譜の作成
について」A38ページ二行目
に「昭和62年のこの日に満100
周年を迎える」とあるのは、
「昭和63年」の誤りです。

(「山岳」編集)

い」資料に基き説明した

評議員会の報告
松田評議員 名誉会員推薦の件は
本年度は該当者なし。しかし名誉
会員推薦の制度の見直しについて
多くの意見が出された。会長諮問
の件については今少し時間をかけ
て審議することになった。

総務委員会
「この人と語ろう」婦懇・
青懇共催
自然保護事務局会議
評議員会
理事会
忘年会ミーティング
会員懇談会
図書委員会
三水会、資料委員会、学生
部指導委員会
婦懇トレッキング報告会、
自然保護事務局会議
科学委員会講演会
総務委員会
「山岳図書を語る夕べ」
フィルム委員会
11月来室者47名

山崎金次郎(八二七) 11・2



(11月)



234-6659

この電話で
お知らせ
しています

◎科学研究委員会の 催しものご案内

①談話会

毎月、談話会を行います。テ
ーマをきめて興味ある話題を提供
します。多数ご来会下さい。
毎回六時三十分から約一時間で
す。

○二月十八日(木)
東南アジアの菓草
山口一孝氏

○三月二十五日(金)
登山の行動科学
千葉 重美氏
小山内正夫氏

②シンポジウム『危険な動
物と安全登山』

登山活動をおびやかす動物がい
ます。毒蛇やヒル、ダニなどはそ
の例ですが、ツツガムシやマラリ
ア、寄生虫なども地域によっては
かなり危険な存在です。
これらの動物の解説と対応の仕
方についてシンポジウムを行ない
ますので多数ご参加下さい。

日時 六十三三年四月十六日(土)

場所 本会ルーム
参加費 五〇〇円(予稿集費)
メインテーマ 危険な動物と安全
登山

講師と演題
講師 千葉県衛生研究所長
太田原美作雄氏
浅沼 靖氏

ダニ 国立科学博物館動物研究部
寄生虫 国立予防衛生研究所
影井 昇氏
近藤 了氏

昆虫とヒル
元、三井金属鉱業KK取締役
塩原幹治氏
クマ 本会会員
中村純二氏

マラリア及び治療全般
本会会員
浜口欣一氏

◎第十六回
山岳史懇談会

テーマ 立教大学山岳部初期の登
山
講師 堀田弥一氏他二名
日時 三月十九日(土)
午後五時三十分より
場所 日本山岳会ルーム
図書委員会

◎三国合同登山記念 テレフォンカード

二枚組(二千元)、三枚組(三
千元)共若干残が有ります。
申し込み 事務局宛
三国登山隊事務局

◎講演会
登山中の水分補給についての講
演会を企画いたしました。会員皆
様の御参加をお待ちいたします。

日時 二月二十六日(金)
午後七時 ルームにて
講師 鈴木政登先生
慈恵医大臨床検査医学
演題 登山と水分補給について
会費 会場整理費として二〇〇円
(医療・集委員会)

【訂正】
会報510号12ページの図書交換会
出品者名のうち高田真哉とあるの
は高田健夫氏の誤りでした。訂正
してお詫び申し上げます。

昭和六十三年一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会
発行者 今 西 寿 雄
編集代表 岡 沢 祐 吉
電話東京(261) 四四三三
振替口座 東京三三三二九番
東京都港区赤坂一三六
赤坂クレースビル

印刷所 株式会社 技報堂

山崎金次郎(八二七) 11・2

山崎金次郎(八二七) 11・2

山崎金次郎(八二七) 11・2

山崎金次郎(八二七) 11・2

山崎金次郎(八二七) 11・2